

## こどもを対象とした「認知症教育」の可能性と課題

小楠 範子, 木村 孝子, 徳永 龍子

### 要 旨

こどもを対象とした認知症教育を実施し、参加したこどもたち 33 名の授業後の振り返りを分析した。その結果、全員が「認知症は脳細胞の病気」と回答した。また、「認知症で困っている人にあったら声をかけることができるか？」との問いには 12 名 (36%) が「できる」と回答し、21 名 (64%) が「自信はないががんばる」と回答した。

感想文の自由記述を分析したところ、＜認知症の人の気持ちへの寄り添い＞＜身近な町の高齢者に声をかける意欲＞＜認知症予防への関心＞＜知識を得たことへの満足＞というカテゴリーが見出された。

こどもたちの五感、特に情報が入りやすい視覚教材の工夫をすることで、こどもたちも認知症について理解することが十分可能であることが示唆された。また、本取組では認知症を単に「脳細胞の障害」ととらえるだけでなく、脳細胞が障害されることで、生活に困りごとがでてくるという視点でとらえ、それを紙芝居で表現した。紙芝居というこどもたちにとって身近な媒体を活用して表現することで、認知症で困っている人へ手助けする気持ちを育むことも可能であることが示唆された。

**キーワード：**認知症教育、児童、生徒、認知症、高齢社会

### I. はじめに

平成 19 年度現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代 GP)において、「認知症教育を通した人づくり・町づくりーいのちの尊厳に溢れた、やさしさの網の目づくりを目指してー」という取組が採択された<sup>1)</sup>。

これは本学が位置する薩摩川内市の特徴、すなわち、高齢者世帯と独居老人の増加に伴い認知症高齢者も増加している地域特性に応じた取組である<sup>2)</sup>。この取組は三段階の構成となっており、第一段階では「認知症援助論」「認知症援助論実習」を開講し、学生を中心に認知症サポーターの育成を目指した。第二段階ではこどもを通して市民の認知症への理解の輪を広げることをねらいとし、「認知症援助論」「認知症援助論実習」を受講し認知症サポーターとなった学生を中心に、小・中・高校生(以下、こども)を対象とした認知症教育を展開した。第三段階では、認知症サポーターの学生を中心にボランティア活動を行い、地域にやさしさの網の目が広がり、認知症の高齢者が安心して暮らせる共生の町づくりへ貢献することを目指した。

現在、認知症の人たちを地域全体で見守り支えていく体制を整える一助として、こどもが認知症を知る手助けとなる絵本<sup>3) 4) 5)</sup>の出版や、こどもを対象とした認知症教育が行われていることがいくつか報告されているが<sup>6) 7)</sup>、まだこの試みは始まったばかりであり、こどもを対象とした「認知症教育」展開について十分な示唆が得られているとは言い難い。

ここでは本取組の第二段階に焦点をあてる。本稿の目

的は、こどもを対象とした認知症教育の可能性と課題について検討することである。

### II. 研究方法

#### 1. 研究参加者

平成 X 年に本学および甕島にてこどもを対象とした認知症教育を実施した。研究参加者はこどもを対象とした「認知症教育」に参加したこども 33 名(小学校 1 年生～中学校 3 年生)とその保護者 3 名である。研究参加者であるこどもの学年については表 1 に示す。

#### 2. データ収集方法および分析方法

こどもを対象とした認知症教育を行い、その後、自記式のアンケート調査を行った。調査内容は認知症教育の内容にそって認知症についての理解などを問うものとした。また、受講後の感想を自由記述で書く欄をもうけた。調査内容は項目毎に分析し、自由記述については意味のまとまり毎にカテゴリー化していった。

#### 3. 倫理的配慮

研究参加者には、研究目的と方法、研究参加への自由意思の尊重、プライバシーの保護などについて説明を行った。アンケートへの記入は無記名とし、アンケート調査の提出をもって研究参加への同意とみなした。

### III. こどもを対象とした認知症教育の展開方法

#### 1. 授業者

授業者は、本学で開講されている「認知症援助論」「認知症援助論実習」を受講し、認知症サポーターとなった学生有志複数名である。1 会場の認知症教育に 5 ~ 7 名の認知症サポーターの学生が携わった。授業構成から実

表 1 研究参加者の学年

校種	小学生						中学生			合計
学年	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年	1 年	2 年	3 年	
大学会場参加者数	1	0	1	1	1	0	2	0	0	6
瓶島会場参加者数	0	3	0	5	6	4	2	4	3	27
合計	1	3	1	6	7	4	4	4	3	33

施まで認知症サポーターの学生が主体となって実施し、教員はそのサポートを行った。

## 2. 認知症教育の展開方法

認知症援助論の中で学生が作成したそれぞれのグループの教材や模擬授業を再編成し、実際にこどもを対象とした認知症教育を行った。

授業は次のように組み立てた。①認知症が脳細胞の病気であることを人体の図を用いておさえた。②脳細胞を家の各部屋に例えて図示し、部屋の役割とその部屋が使えなくなったときの「困りごと」を考えた。③脳の模型に実際に触れる機会を設けた。④脳細胞が障害されることで生じる「困りごと」を「ヨネさんの一日」という紙芝居で提示した。⑤ヨネさんに声かけを行うロールプレイを実施した。授業全体の時間は 60 分程度であった。

また、こどもたちが楽しみながら授業に参加できるよう、授業の合間に「早口ことば」などのレクリエーションの時間を設けた。レクリエーションでは、こどもたちの楽しみを大切にすると同時に、認知症予防の側面と関連させながら、大きな声を出し脳に酸素を送り込むことの重要性についても伝えた。

こどもを対象とした認知症教育への参加者募集は市の広報などを用いて行った。対象は小学生から中学生としていたため、授業準備は小学 3 年生の理解を想定しながら行った。小学 1 年生の参加も見こし、教材にはすべて振り仮名をつけるなどの配慮をした。

## IV. 結 果

### 1. 認知症についての理解とかかわりへの意欲

授業後のふりかえりを分析したところ、33 名全員が「認知症は脳細胞の病気」と回答していた。また、「認知症で困っている人にあつたら声をかけることができるか？」との問いには 12 名 (36%) が「できる」と回答し、21 名 (64%) が「自信はないががんばる」と回答した。

### 2. 受講後の感想

33 名のこどものうち 27 名が受講後の感想を記入していた。記述は全部で 41 文あり、それらを分析した結果、＜認知症の人の気持ちへの寄り添い＞＜身近な町の高齢者に声をかける意欲＞＜認知症予防への関心＞＜知識を得たことへの満足＞という 4 つのカテゴリーが見出された。以下に各々について述べる。

＜認知症の人の気持ちへの寄り添い＞は、認知症の人の「寂しさ」や「悲しさ」、声をかけてもらおうと「安心する」気持ちについて感想文の中で再度想起していることを指している。「ヨネさんの一日」の紙芝居で認知症の人の困りごとにふれたこどもたちは、認知症の人の寂しさや悲しい気持ちをしっかりととらえていた。そして、誰かが声をかけることで、認知症の人でも安心して生活できるということを学んでいた。

＜身近な町の高齢者に声をかける意欲＞は、困っている町の高齢者に積極的に声をかけたいということもたちの意欲の表明であった。「ヨネさんの一日」の紙芝居で認知症の人の困りごとにふれ、町の誰かが声をかけることでヨネさんの困りごとが解決し、安心できたことを学んだこどもたちは、認知症の人に声をかけることの大切さを実感していた。さらにロールプレイの中で認知症の人に声をかける練習をしたことで、「困っている人がいたら声をかけたい」という意欲が高まっていた。

＜認知症予防への関心＞は、認知症予防の視点から大好きな歌を積極的に歌いたいという気持ちを表している。今回の授業の中では早口言葉などのレクリエーションを盛り込んだ。その中で、歌ったり大きな声を出したりして脳に酸素を送り込むことの重要性についても伝えた。元々歌が大好きだったこどもは、これらの学びを敏感に受け止め、大好きな歌を今後も積極的に歌いながら認知症予防につとめたいという気持ちを表明していた。さらに、歌を歌うことは手軽にできることであり、家族みんなで歌を歌いたいという記述もみられ、学んだことを家族にも伝えようとするこどもの姿が読み取れた。

＜知識を得たことへの満足＞は、認知症について学べたこと自体への満足感であった。脳の模型に実際に触れたり、ロールプレイや早口ことばなど、参加型の授業展開の中で認知症について学べたことは、こどもたちの満足度を高めていた。

### 3. 保護者の感想

保護者からは、「こども目線で講義が組み立てられており」「こどもが楽しみながら学習できた」との評価があった。

今回のこどもを対象にした認知症教育は、大学側がこどもたちのいる特定の学校に赴くのではなく、大学などの会場に参加希望者を集める形をとった。その結果、少

人数の参加者での開催となった。結果的にこれは授業者である学生が参加者のこどもたちに密接にふれることとなり、学生もこどもたちの名前を呼びながら授業をすすめることができた。少人数の参加のため認知症の人に声をかけるロールプレイも参加したこどもたち全員が体験できる形となり、参加したこどもたちはもちろん保護者の満足度を高めることにつながっていた。小学1年生など低学年のこどもと共に出席した保護者からは、「小学生に認知症のことが理解できるのか不安だったが、小学1年生のこどもでも楽しみながら学ぶことができた。参加してよかった」との声があった。

## V. 考 察

### 1. こどもたちが認知症を理解することを助けた“視覚に訴える”教材

今回、認知症援助論を受講した学生が作成した教材を活用して、実際にこどもたちに認知症教育を行った。その結果、33名全員が「認知症は脳細胞の病気」と回答した。こどもたちの生活に身近な「家」を例えに図示することで、目に見えない「脳細胞」をこどもたちもある程度はイメージすることができ、認知症を理解するための手助けになったと考えられる。また、脳の模型に実際にふれることで認知症が脳細胞の病気であることをこどもたちもしっかりとらえることができたのだと思われる。

ひとが知覚する全情報の75%は視覚から吸収されており、聴覚からの吸収は15%といわれる<sup>8)</sup>。脳細胞を家に例えて図示し、脳の模型を実際に見せ、触れる体験は、こどもたちの視覚や聴覚、触覚を通して情報を伝えることであり、五感をふるに活用することで、こどもたちにとって難しい疾患である認知症を理解することが可能になったと推察される。

また、認知症を単に「脳細胞の障害」ととらえるだけでなく、脳細胞が障害されることで、生活に困りごとがでてくるという視点でとらえ、それを紙芝居というこどもたちにとって身近な媒体を活用して表現することで、認知症で困っている人へ手助けする気持ちを育むことにつながったと考えられる。

認知症の人が社会の中で生きていくためには周囲の手助けが必要である。そのためにも周囲の認知症に対する正しい理解と認知症の人への尊厳をもったかわりが不可欠である。認知症は他の疾患と何ら変わらない身体の一部である脳細胞の疾患であることを理解することは認知症への理解の第一歩としてとても重要なことである。

こどもたち、特に高齢者と接することの少ないこどもたちにとって認知症はそれほど身近な疾患ではないかもしれないが、こどもたちの生活に身近なものを例にしながら話すことで、こどもたちにも十分に理解可能である

ことが示唆された。授業の展開次第では、認知症の人を手助けするための輪がこどもたちにも広がっていく可能性が十分にあるといえ、こどもたちの五感、特に情報が入りやすい視覚教材の工夫を試みながら、正しい知識をこどもたちにわかりやすく伝える必要があるといえる。

### 2. こどもたちの学習環境への配慮

小学校の総合学習の中で認知症教育を試みた細川ら<sup>6)</sup>の報告では、受講した児童のうち認知症ということばを聞いたことのある者は約15%であり、60%の児童は聞いたことがないと答えている。高齢社会を学ぶこどもたちの教材の中に認知症についての項目が加わってきているとはいえ<sup>9)</sup>、こどもたちにとって認知症はそれほど身近な疾患ではないことがうかがえる。しかしながら、認知症をもつ祖父母と暮らしているこどもは、こどもであっても認知症について理解することの必要性を感じており<sup>10)</sup>、高齢者社会の現状を考慮すると、今後こどもたちと共に認知症について学んでいくことは重要な課題になるとと思われる。

本研究ではこどもを対象とした認知症教育の参加者を募る形をとり、結果的に少人数での開催となった。これは、授業者である学生が参加者のこどもたちに密接にふれ、こどもたちの名前を一人ひとり呼びながら授業をすすめることを可能にした。また、認知症の人に声をかけるロールプレイも参加したこどもたち全員が体験できる形となった。授業の最後に、こどもたちが認知症を脳の病気と理解し、認知症の人への声かけを行っていきいたいという意欲を示したのは、授業者である複数の学生と少人数の参加者であるこどもたちが密接にかかわったことが影響しているとも考えられる。小学校の総合学習の中で認知症教育を試みた細川ら<sup>6)</sup>も、大学生のサポートによって認知症について考えるこどもたちのワークが進んだということを示しており、本研究も同様の結果を示したこととなる。

高齢者を支える社会づくりのために、こどもたちと共に認知症について学ぶことは非常に重要である。しかし同時に、こどもたちにとって認知症はそれほど身近な疾患ではないことも考慮し、認知症について学ぶこどもたちの学習環境への配慮が求められる。そのためには、一人の授業者がこどもたちに教える体制ではなく、こどもたちの理解度を確認し、必要に応じてサポートできるチーム・ティ칭ングの体制をとるなどの工夫が求められる。また認知症の人は、周囲の人々の助けを必要としている。したがって、ロールプレイなどを取り入れた参加型の授業の工夫も重要になってくるとと思われる。

## VI. 結 論

こどもを対象とした認知症教育を実施し、参加したこどもたちの授業の振り返りを分析した。その結果、全員

が「認知症は脳細胞の病気」と回答した。また、「認知症で困っている人にあったら声をかけることができるか？」との問いには12名(36%)が「できる」と回答し、21名(64%)が「自信はないががんばる」と回答した。

こどもたちの生活に身近なものを例にしながら話すことで、こどもたちも認知症について理解することが十分可能であることが示唆された。こどもたちの五感、特に情報が入りやすい視覚教材の工夫を試みながら、認知症についての正しい知識をこどもたちにわかりやすく伝える必要がある。また、こどもたちの理解度を確認し、必要に応じてサポートできるチーム・ティ칭ングの体制をとることの重要性も示唆された。

## VII. 研究の限界と課題

本研究結果は33名の参加者から導き出されたものであり、一般化には限界がある。こどもを対象とした認知症教育を今後も複数回行いながら、こどもたちにとっての認知症教育の意義を確認すると共に、こどもたちの理解を促す教材づくりや授業展開の工夫についても探究していく必要がある。また、実際にこどもたちに授業を行った学生にも焦点をあて、授業者である学生にとっての認知症教育の意義についても検討していく必要がある。

## 謝 辞

研究にご協力いただいた研究参加者の皆様に感謝いたします。また、こどもを対象とした認知症教育の開催にあたり、ご協力いただきました皆様に感謝いたします。

本研究の要旨は第10回日本認知症ケア学会で発表した。

## 文 献

- 1) 文部科学省 平成19年度現代的教育ニーズ取組支援プログラム選定結果について(報告) [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/19/07/07072005.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/19/07/07072005.htm)
- 2) 木村孝子:認知症を取り巻く現状から;認知症サポーターの必要性. 鹿児島純心女子大学看護栄養学部紀要, 12:1-7,2008
- 3) 加藤伸司(監修):ぼくのおじいちゃん. 第1版, ワールドプランニング, 東京, 2006
- 4) 本間昭(監修):おばあちゃんどこいくの. 第1版, ワールドプランニング, 東京, 1992
- 5) 認知症ケア研究会:いつだって心は生きている. 第1版, 中央法規出版株式会社, 東京, 2006
- 6) 細川淳子, 金子紀子, 前田充代, 天津栄子, 松平裕桂, 金子克子:A小学校の総合学習に「認知症」の学習を取り入れて. 石川看護雑誌, 6:53-58, 2009
- 7) 山崎龍二, 西川勝:子どもに対して認知症をどのように伝えるか 子どもを中心とした認知症ケアのコミュニティ創造のなかで. ホスピスケアと在宅ケア, 16(2):182, 2008
- 8) 中桐佐智子:保健指導案の作成. 大谷尚子, 中桐佐智子:養護実習ハンドブック. 第2版, 東山書房, 東京, 2009, 165-170
- 9) 一番ヶ瀬康子(監修):高齢社会って, どんな社会?. 第1版, くもん出版, 東京, 2001
- 10) 北川あゆみ:おばあちゃんが認知症になって感じたこと. 認知症のひとと家族への援助をすすめる第23回全国研究集会, 13-14, 2007

## The Potentiality and Problem of 'Learning about Dementia' Class for Children

Noriko Ogusu, Takako Kimura, Ryuko Tokunaga

Department of Nursing, Faculty of Nursing and Nutrition,  
Kagoshima Immaculate Heart University

Key words : Learning about dementia, pupils, students, dementia, aging society

### Abstract

After giving Learning about Dementia lessons to children, 33 children participants' comments were analyzed. All of them responded that dementia is a disease of brain cells. And, to the question 'If you see someone in trouble because of dementia, can you speak to him/her to offer help?' , 12children (36%) answered they 'can' , and 21(64%) said they are 'not so sure but try' .

Four categories were observed through analysis of the comments freely written by them; compassion on the patients of dementia; willingness to speak to the elderly in their neighborhood; interest in preventing dementia; satisfaction for acquiring the knowledge.

It has become clear that children can fully understand dementia if given the materials suitable for sensory comprehension, especially visual aids which is effective to transmit information. Also in this project dementia was presented not only as 'the defect of brain cells' but also as the problem leading to troubles in daily life, which was shown by stories illustrated with picture cards. Communicating through such a media as story telling accompanied by picture card illustration, which is so familiar to children, it was proved possible to cultivate the willingness to help the people who are suffering from dementia.

---